**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６９回　（２０２０年１１月２２日）**

**・勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」４０頁**

**（前回のまとめ）**

・タットガタ（神への専心/神への没頭）に至るには、「すべての関係を神との関係でつくる」「すべての行いと神との関係で行う」。実践方法は３つ。①内に神への愛を育てる＝神だけが好き、神以外何もいらない状態。②生活の中心が神＝仕事の中心も神、仕事の結果も神、結果のお任せも神。③すべての人に神を見る。

**（今回の勉強）**

**📖『福音』４０頁下段　７行目**［＊前回も読んだ箇所です］

*もし人が神を愛するようになれば、これらのにあまりあくせくする必要はありません。風のないあいだだけ、扇は必要なのです。南風が吹きはじめれば扇は片づけられます。そのときにはなんで扇の必要がありましょう。*

**（解説）**

シュリー・ラーマクリシュナがおられたドッキネッショル寺院はインドのベンガルにあります。ベンガルの南は海（ベンガル湾）、北はヒマラヤ。ベンガルの夏は朝から夕方までとても暑いですが、夕方になると南の海から風が流れてきて少し涼しく感じます。すると扇であおぐ必要はなくなります。ここで、なぜ南風が出てくるのか、それはこうした説明を聞かないとわからないと思います。インドの扇はヤシから作られています。子供のときには扇風機ではなくいつもその扇を使っていました。日本画ではよく日本の女性が着物を着て美しい扇を持っていますね。日本でも昔は扇を使っていました。

**神への愛のしるし**

さて、「*もし人が神を愛するようになれば*」が今日の話のテーマです。信者がもし本当に神を愛するようになったら、そうしたら霊的実践の必要はなくなります。なぜならすべての霊的実践は内に神への愛を育てるためのものだからです。

では本当に神を愛したという「しるし」は何でしょうか？

まず外のしるしです。たとえばお母さんは赤ちゃんのために必要なら夜も寝ずに世話をします。毎日それを続けるのは大変なことですが、しかしお母さんは気にせず喜んで世話をします。お金を稼ぐベビー・シッターは別として、夜寝ずに世話をするのは普通の愛以上のものと言えます。それが外のしるしです。

中のしるしはどうでしょうか。赤ちゃんが寝ています。お母さんは家事をしています。そのときのお母さんは外から見たら掃除や洗濯など仕事をしています。しかし中の心は、掃除や洗濯は20％、残りの70％、80％は赤ちゃんのことを思い気にかけています。その状態はお母さんが作為したのではなく、内から自然に起こった自発的な状態（spontaneous：スポンテニアス：自発的、自然に起こる、自動的な、という意味）です。それが中のしるしです。

神への愛は、それに重ね合わせてイメージしてください。シュリー・ラーマクリシュナの言うことは、神を本当に愛せたら、母親がいつも心の中で「赤ちゃん、赤ちゃん」と思っている位、信者は心の中でいつも神を思っている、ということです。あるときだけ思い出して他のときには忘れているのでもなく、実践するときに神を思い出そうとして実践するのでもありません。

そして、神への愛が育ってくると、心の大きな部分で常に神についてだけ考えるようになり、仕事のときにも神を忘れなくなります。先ほど前回の復習に出てきましたが、「仕事のときにも神の仕事、仕事は神へのお供え、神を喜ばせるために仕事」という考えに自然になるのです。もちろんこれは中（心）の状態ですから本人でなければわかりませんが、それがしるしということです。

スポンテニアスのしるしとして、別の表現もあります──目覚めているときにも寝ているときにも夢見のときにも神様のことを考えている──起きていても寝ていても、内から自然にその状態が起こってしまうのです。

**神への愛は自発的なのに、なぜ神への愛を育てるための実践が必要なのか**

私たちが知っている「自発的な愛」にはどのようなものがあるでしょうか。まず母親の赤ちゃんへの愛があります。それは最初から自発的な愛です。次に、たとえばお見合いがきっかけの愛の場合は、見合い前には愛はなく、結婚してから徐々に愛が育ち、やがて自発的で自然な愛になります（あとで減るケースもありますが）。また何らかの原因で以前あった愛が忘れられ、別の原因でそれを思い出し、その後自発的な愛に発展する場合もあるでしょう。

それらの愛の中では、母親の赤ちゃんへの愛が最も信者の神への愛と似ています。しかしここで疑問が生じます。母親の赤ちゃんへの愛は自発的なものに間違いありませんが、では信者の神への愛は自発的なのだろうか、ということです。なぜなら私たちはいろいろな霊的実践をしなければ神への愛を育てることができません。ですが自発的なものなら、その実践──神への祈り、瞑想、神の御名を唱える、心を純粋にするなど、神への愛を培い育てることを目的としたすべての霊的実践──は必要ないでしょう？　お母さんは赤ちゃんへの愛を培うために何か実践をしていますか？（笑い）　いいえ、実践せずとも赤ちゃんへの愛は自然に出ています。

私はこのことを皆さんに問いたい、「神を愛するために実践が必要なら、その愛は自発的とは言えないのではないか？」と。

（参加者）自発的だと思います。

どうして？

（参加者）『福音』の中に磁石と鉄の説明があります。鉄が土で汚れていると、本来は自発的に引き合っているものが汚れのために引き合わなくなってしまう。そして、なぜ汚れているかというと、カルマ、でしょうか。自分の過去の行いによって汚れてしまっている、その理由からです。

そうですね、それが正しいです。

磁石は鉄を引きつけます。それは自然的・自発的です。しかし汚れていると引きつけない。汚いものを落とす方法は、シュリー・ラーマクリシュナは「神のためにたくさん泣くことです。涙によって汚いものは消える」とおっしゃいました。

私はもう１つの例を『ブリハドアーランニヤカ・ウパニシャド』から引用して説明します。それはヤッギャヴァルカが妻マイトレーニーに語った教えです。ヤッギャヴァルカは家住者でしたが（古の聖者はほとんど家住者でした）、様々な実践をおこなって偉大な聖者となりました。悟った人の中でも霊的なレベルがとても高かった方です。

ヒンドゥ社会の伝統的な考えに、「アーシュラマ」（）というものがありますが、

［＊『パタンジャリ・ヨーガの実践　～そのヒントと例～』用語解説より：ヒンドゥ聖典は人生を４つの時期に区分するが、どの時期においてもブラフマンに意識を置いて生活することが重要とされる。①学生期（ブラフマチャリヤ）②家住期（グリハスタ）③世間から退き森に隠棲し、霊性の修行に励む林住期（ヴァーナプラスタ）④遊行期（サンニャーサ）］

ヤッギャヴァルカは霊的実践をさらに積むために、家族から離れて森へ行くことにしました。ヤッギャヴァルカには２人の妻がいて、彼女たちに財産を分け与えることにしました。すると一方の妻のマイトレーニーが言いました、「それをもらうことで、私は不死となりますか？」　ヤッギャヴァルカは答えました、「財産をもらえたら今の生活より良い生活を送れるだろう。しかし富で不死を得ることはない」。それを聞いたマイトレーニーは「それでしたら富は望みません」と答えました。

これは私たちが普通に考える妻の答えとは全く異なります。「不死にならないものをもらって私はどうしますか？」というマイトレーニーの答えはとても有名です。ヤッギャヴァルカはその答えに喜んで、「今までも愛していたが、今はさらに愛しています」と言い、不死となるための霊的助言の数々を教えました。

**「夫が愛しいのは夫の故ではなく、アートマンが愛しい故に、夫も愛しいのである」**

**「妻が愛しいのは妻の故ではなく、アートマンが愛しい故に、妻も愛しいのである」**

**「子供たちが愛しいのは子供たちの故ではなく、アートマンが愛しい故に、子供たちも愛しいのである」**

［👉『ウパニシャド』174頁、日本ヴェーダーンタ協会、2016年発行版］

人は様々なものを愛しますが、その中心は「自分」です。普通、人が夫や妻や子供を愛するのは「自分の」夫や妻や子供だからです。つまり、人は最も「自分」を愛していますが、その愛は「自分の」からだや心への愛です。すなわち人の夫や妻や子供たちへの愛は、そこに「自分の」からだや心を見ているから愛しているのです。

しかしヤッギャヴァルカが教えた霊性の知識では「からだや心」ではなく、からだや心の基礎である「アートマン、魂」を見ているから愛すのだ、と言っています。愛している自分の魂を相手の魂にも見るから愛すのだというのです。

私たちは誤解して愛の対象を「からだや心」と考えています。しかしすべての愛の基礎はアートマンです。だから真理は、「本当の愛は『からだや心』と関係ない、『魂』である、なぜならそれが愛の基礎だから」と言うのです。ですから本来親は、自分の魂を子供の魂に見ているから子供を愛しているのです。

神と信者との愛も同じです。神はどうして信者を、人間を愛するのか？　なぜなら神は自分の魂を信者の魂に見ているから。信者もどうして神を愛するのか？　自分の魂を神の中に見ているからです。これは自然的・自発的です。なぜなら「同じものへの愛」は自発的に生じるのが自然であり普通だからです。同じ仕事仲間、同じ国、同じ宗教の人同士の愛は、普通でしょう？　自分の国にいるときにはわからなくても、一人で外国に行って現地で母国の人に会うとまるで親戚のような気持ちになりませんか？

神と信者との愛についても、同じことを、もっと深い意味で言っています。神の本性と信者の本性は同じサット・チット・アーナンダ（絶対の存在・絶対の知識・至福）、一緒ですから、同じ魂と同じ魂ですから、だから引きつけ合うのはナチュラルで自発的なことなのです。それをシュリー・ラーマクリシュナは磁石と鉄の例を使い、ヤッギャヴァルカは哲学的に説明しました。

**愛の自発性を妨げる障害──マーヤーとサムスカーラ**

しかし、今の私たちの態は、魂への気づきがなく、からだが原因、結婚が原因、生まれが原因、家族が愛の原因だと思っています。ではなぜ魂への気づきがないのでしょうか？　それはマーヤーという霊的な無知があるためです。マーヤーがあるので魂に気づけません。霊的実践はマーヤーを取り除くために行うもので、マーヤーが取り除かれれば信者の神への愛は自発的な状態へと戻ります。

また、マーヤーの他にサムスカーラもあります。

サムスカーラとは、良いことでも悪いことでもそのどちらでもないことでも、何回も何回も同じことを考えたり同じことをしたりすることによってその人につくられる「傾向」です。つまり、何回も同じことを考えたり行動したりしたことがその人の「性格の一部分」になるのです。何回も嘘を言えば嘘を使うことが性格の一部分になります。盗み、強欲、残酷も同様です。もちろん良いサムスカーラもあります。

では、サムスカーラも性格、神聖な性格（divine nature）も性格です。両方とも性格ですが、何が違いますか？

サムスカーラは作られるものです。以前は無かったが、何回も同じことを思い出し話すことでサムスカーラは作られ、それを今生に持ってきて私たちは生まれました。そして今生でも私たちは新たなサムスカーラを作っていきます。

一方、神聖な性格を作ることはできません。それは前からあります。気づきがないだけです。わかりましたか？　サムスカーラと神聖な性格（divine nature）は両方私たちの性格ですが、違うものです。なぜなら神聖な性格は作ることができません。魂を作ることができますか？　できないですね。魂はずっとあります。魂がずっとあれば、神聖な性格もずっとあります。

たとえば砂糖の性格（nature）は「甘い」です。そのことに例外はありません。最初から最後までそのことに例外はない。塩は絶対に「しょっぱい」です。それに例外はありますか？　ないでしょう？　同じように、アートマンの、魂の、本当の性格はdivine（神聖）です。それに例外はないのです。だから「本性」と言うのです。ですから「サムスカーラは性格の一部分になっている」のは正しいですが、しかしながら、サムスカーラを本性とは言わないのです。

私たちの本性は神聖な性格である──これは大きな希望（Great hope）です。私たちの今の状態は否定的なサムスカーラでいっぱいですが、しかしそれは私たちの本性ではありません。今の状態はとても汚いですけれども本性ではない──これはとても良いことではないですか？　私たちにとってとても希望があります。とても楽観的です。私たちはいろいろな原因で悪いサムスカーラが性格の一部となっている。それは確かに正しい。ですがその状態が永遠ではないです。なぜならサムスカーラは本性ではないですから。本性は神聖な性格（divine nature）ですから。

そのことは『バガヴァッド・ギーター』にも明言されています。［👉第９章３０節］罪びとよりも罪びとと言われる人でも、ひたすら神を信じて礼拝するなら聖者になる可能性があります。なぜなら本性は神聖ですから。これはグレート・オプティミスト、オプティミスティック、肯定的、楽観主義のことです。

**霊的実践の目的**

しかし今の私たちの状態は、そのことへの気づきがありません。ですから霊的実践が必要なのです。ではなぜ実践するか、それについては２通りの説明が可能です。①神への愛を育てるため。今は一時的・世俗的なものに向かっている愛を、神への愛に変え、それを増やし育てるためです。②気づきのため。今は気づいていない本当の性格（神聖な性格）に気づくためです。言っていることは①も②も一緒です。同じことを別の観点から説明しているだけです。

さて、前回も引用しましたが再度『バガヴァッド・ギーター』第９章の３４節を見てください。

*マン・マナー　バヴァ　マド・バクトー　マッデャージー　マーン　ナマス・クル / マーム　エーヴァイッシヤシ　ユクトヴァイヴァム　アートマーナン　マト・パラーヤナハ//(9-34)*

*常に私のことを想い、私の信者として、私を供養し、礼拝するがいい。君が私を最高の目的とし、常に君の心を私に結び付けているならば、君は必ず私のもとへと到達する。』と。*

興味深いのは、本当に同じことが第１８章６５節にもあることです。

*マン・マナー　バヴァ　マド・バクトー　マド・ヤージー　マーン　ナマス・クル / マーム　エーヴァイッシヤシ　サッテャン　テー　プラティジャーネー　プリヨーシ　メー//(18-65)*

*常に私を想い、私を信じ、私に供養し、私を礼拝しなさい。そうすれば、君は必ず私のに来られる。君は私の信愛の友だから、そのことを君に約束する。*

読み比べてどうでしょう、同じことを言っているでしょう？　とても大事なので、シュリー・クリシュナは２度同じことを言いました。では第１８章６５節の翻訳をもう一度読んでください。

（参加者に向かって）早口で読まないで、１つ1つの言葉に集中して読んでください。

「*マン・マナー*」は「*常に私のことを想い*」ですね？　これを読んだら「常に私は神を思っているか？」と自分にたずねてください。「いいや、他のこと、仕事や家族のことを思っている」なら「では何が理想か？」「神の助言は何か？」と考える。そうしながら読み進めてください。これが『バガヴァッド・ギーター』の勉強の仕方です。１つ１つの言葉に集中して自分の状態をチェックしつつ読む。そうしなければ、自分の中に入っていきません。早く読んだら何のイメージもできないですね。

**本当の信者になるための条件**

これらの節の前半には、本当の信者になって神を悟るための条件（condition）が書いてあります。「*マド*」とは「私」、つまりシュリー・クリシュナのことですが、個人的なクリシュナではなく神クリシュナです。

　・条件１「*マン・マナー*」（いつも神を思ってください）→私はいつも神を思っているか？　いいえ、仕事、親戚、過去のこと、未来のことを思い、神についてあまり思い出していません。必要なのはいつも神について考えることです。

　・条件２「*マド・バクトー*」（いつも神を信じてください）→私は本当に神を信じているか？　神の有無を問われて神はおられると答える程度の信者では、この条件を満たせません。また神に祈っても神は祈りを聞いてくれないと思い、信仰が減る信者も同様です。「神はいつも私のことを見ている、私のことをすべてご存知で、今までの考えや行動、現在の考えや行動、未来に私がどうなるかまで、すべて知っている」というほどの信仰、「神に祈れば祈りはすべて聞いてくれる」というほどの信仰を持てたら、この条件を満たすことができます。

　・条件３「*マド・ヤージー*（18-65）*、マッデャージー*（9-34）」（いつも神を礼拝しお世話する）

　・条件４「*マーン　ナマス・クル*」（いつも神に敬礼する）→普通の敬礼は、神像や祭壇の前で額づいたり、全身を床に伏せて敬礼します。ですがそれは肉体で行う形式的な浅い敬礼とも言えます。本当の意味で神に敬礼するということは、「神の言うことに従う」ことです。神の言うことに従わずに肉体上の敬礼だけしても、敬礼の意味がないし、矛盾も生じます。また、グルの言うことに何も従わずにグル（霊性の師）にプラナーム（敬礼）しても、それは本当のプラナームではありません。本当の敬礼をすることで神への愛は育ちます。

**条件が満たされた結果**

では結果は何ですか？　各節の後半を読んでください。

「*そうすれば、君は必ず私のに来られる*」（18-65）

「*君が私を最高の目的とし、常に君の心を私に結び付けているならば、君は必ず私のもとへと到達する*」（9-34）

「*君は必ず私のに来られる*」「*必ず私のもとへと到達する*」が結果です。しかしこれは、天国のとある場所とか肉体的な場所を指しているのではありません。それは「神と信者がひとつになる」という意味です。ですから「神とひとつになる」「神と一緒に住んでいる」「神の性格とひとつになる」ことをイメージしてください。場所のイメージをせずこのイメージをすることが大事です。

「神と信者がひとつになる」と、「不死になる」「永遠な至福を得る」「最高で絶対の知識を得る」「神の本性と自分の本性が一緒になる」「神とずっと一緒にいる」「神の性格と自分の性格がひとつになる」「サット・チット・アーナンダ」になります。

**結果を得るための実践方法**

ではその結果を得るために、私たちはどのような実践をすればよいのか。繰り返しになりますが、すべての霊的実践の目的は「神への愛を増やす」ため、別の言い方で「自分の神聖な本性に気づく」ためです。ではそのための方法は何ですか？　４つのポイントがあります。

１つ目のポイントは、「Love for the sake of love」愛のための愛、愛のためだけに愛、見返りを何も考えない純粋な愛です。

一般的な愛の中では母親の子供に対する愛は理想の愛と言えますが、その中に見返りのことが多少はあるかもしれません。当人の意識には浮かんでいないので「子供がいさえすれば私は何もいらない」と言うかもしれませんが、潜在意識では老後の面倒を見てもらおうと考えているかもしれません。

ですがLove for the sake of loveの愛で信者が神を愛すと、見返りなど何も考えないで愛します。自分の身体のため、家族のため、病気を治すため、欲望の満足のため、お金のために神を愛することはありません。それだけでなく、解脱についても考えません。その信者は神を愛することだけで十分だからです。

それが本当の純粋な愛です。だから解脱のために神に祈るという考えも、純粋な愛が欲しいという願いもありません。「私はあなたを愛して喜ぶ」、それで終わり。別の見返りも期待も何もありません。その愛に取引はありません。たとえばブリンダーヴァンのゴーピー（牛飼いの女性）たちのクリシュナへの愛です。それに比べて、普通の愛の状態は、その愛の中に絶対に見返りのことがあります。それは理想的な愛ではありません。

２つ目のポイントは、「私はあなた（神）だけ欲しい。他のものはいらない」です。普通の愛の状態は「神も好き、神を悟りたいけれども、他のいろいろなものも欲しい」です。しかし理想はそうではなく、神だけを欲する状態です。

３つ目のポイントは、「すべてのものはあなた（神）のもの」です。しかし普通の愛の状態は、私の子供、私のお金、私の家族、私の家、私の身体、私の年齢、私、私ばかりです。普通は「全部が私」です。神はどこですか？　そこに神はいません。しかしそれを変化させて「私は神様の身体、息子は神様の息子、家族は神様の家族、お金は神様のお金」となる。

シュリー・ラーマクリシュナは「ナーハム・ナーハム・トゥフー・トゥフー」（私ではない、私ではない、神様あなた、あなたです）と言いましたが、これは、最初は心のレベルで行うべき実践です。口で、口だけで「ナーハム・ナーハム・トゥフー・トゥフー」と言ってもあまり意味がありません。心のレベルがそのように変化していないのに口だけで言っていても、フィーリングスがなくなります。まるでオウムのように──インドでオウムは人気のペットです。信者は自分のオウムによく神の名前を教えます。たとえば「ラーダークリシュナ」。しかしオウムはそれが食べ物のことなのか、神様の名前なのかわからずにただ口で言っているだけです──それと同じフィーリングスになります。私たちが「ナーハム・ナーハム・トゥフー・トゥフー」を実践するなら、心のレベルで、思いのレベルで本当にそのように変化しないと、それはできません。

４つ目のポイントは、「神以外、何もない」です。様々なものに見えるすべてものは、神のいろいろなあらわれです。すべては神です。札幌雪祭りでは動物や建物や様々なものが展示されていますが、すべては雪から出来ています。いろいろな名前（タイトル）が付けられていますが、すべては雪です。それと同様に、すべては神です。神以外何もありません。

以上

**＜Q＆Aより抜粋＞**

**Q）**私は特定の神を持っていないので、これだけ神様への愛についてうかがっていても、具体的に神様のイメージができず困っています。イメージしたほうが多分わかりやすいというか、もっと愛を捧げることができると思うのですが…。

**A）**今の質問は「神様の具体的なイメージがないと、さっきの４つのポイントを思い出すのは難しいのではないか」ということです。これは大事な質問、大事な混乱だと思います。

インド人にその混乱はあまりないです。インド人は神の様々な姿（相）を礼拝しています。たとえば形がないが性質がある神、形も性質もない神、形も性質もある神です。形も性質もある神は、神像としてシヴァ神、ドゥルガー女神、カーリー女神etc.として礼拝されています。日本でもお釈迦様の像がありますね。信者はその中から１つピックアップして神のイメージを持ち、たとえばシヴァの信者は「シヴァ以外何もない」と思いシヴァを礼拝します。また、シヴァを愛するためにシヴァを愛します。そのように実践します。

それから神の化身（たとえばラーマ、クリシュナ、ラーマクリシュナなど）も同様です。たとえばラーマの信者はラーマを神としてイメージし、神を愛するための愛はラーマを愛するための愛となります。神以外何も欲しくないという実践はハヌマーンのように、「ラーマだけ欲しい」という実践になります。すべては神の実践は、人間もラーマ、石もラーマ、動物もラーマとなります。

その上で重要な理解は、シヴァ、クリシュナ、ナーラーヤナ、ヴィシュヌ、クリシュナ、ラーマクリシュナは別々ではないということです。同じ「神」という存在の、別々のあらわれだということです。これは、劇中で同じ人が二役、三役演じることとか、電球がいろいろな色のガラスに入れられるとその色に見えるけれども中の電気は変わりないことを思い出せば理解できると思います。

それで、インド人については問題ない。またイエスの信者はイエスのことを考え、お釈迦様の信者はお釈迦様のイメージをするので、彼らにも問題はないです。問題は「神意識」だけを信じている人の場合です。その場合、神のイメージが、無理ではないが、難しいです。

（質問者）難しいです。

神意識、つまり形がない・意識だけの神も１つの神のイメージですが──たとえばイスラーム教徒の神のイメージは、形はない・意識だけです──そのときイメージがちょっと難しい。助言は、神のイメージを１つ決めてください、ということです。あなたにはお釈迦様のイメージはできますか？

（質問者）私は毎朝、神道と仏様に挨拶をしているんですね。

では神のイメージを仏様と考えてください。結果は同じです。仏教の教えにも同じことがあります、すべてがお釈迦様であると。実践しないと進まない。それも正しいですから。

（質問者）はい。

進むために絶対１つイメージを決めないと、恐れはなくならない、無知はなくならない、執着はなくならないです。そして大事は１つ存在だけ、その存在は、絶対の至福・絶対の知識・絶対の存在です。神についてそのイメージをつくって、そして決めてください。なぜなら意識だけではちょっとイメージが出ないですから、形がありますと助かります。

日本人にはその混乱が多いです。たとえばもし神道だけと考えると、自然が神となりますが、自然が神だと、木も自然、山も自然、空も自然となって、集中ができません。

（質問者）そうなんです

集中しないと心も静かになりません。

（質問者）それで、で、天照大御神をイメージするのですが、とってもイメージしにくいんですね。でも私はどちらかというと、お釈迦様よりも、神道系のほうが好きなんです。でも瞑想しても、いろんなことが…。

そして言っています、集中できません。あるとき空のイメージが表れ、あるとき木が表れ、あるとき海が表れます、すると心は落ち着かない状態になります。

心の落ち着きのために、絶対に１つに集中することが大事です。それは基礎的なことです。神道は集中が難しい、それが問題です。なぜなら集中の対象（自然）がいろいろあるからです。

（質問者）具体的に神への愛となると、どこに愛を持っていけばいいのかがわからないのです。

そうです、問題のポイントは集中ができない。どこに神が存在しているのか、それを最初に決めないと、選ばないと、集中の問題が出ます。集中の問題が出ると先に進めません。

ですから神道は瞑想の実践についての言及がありません。仏教にはあります。もちろん神道にもいろいろ良いことがありますが、問題はそうです。神道を信じて悟った人はあまり聞いたことがありません。

（質問者）ですが私の知っている人が、悟ってから神道になったんですよね。

ですが普通はあまり聞いたことないです。もちろんどこにでもいます。

（質問者）そしたら仏教の方が入りやすいですね。

仏教、ヒンドゥ教、キリスト教もあります。ですが神道でも、空だけ、太陽だけ、というように１つだけ取り上げてそれに集中すれば、ＯＫです、問題ない。なぜならどこにでも神様はいますから。しかし、ある日は空、ある日は海、ある日は山、という状態だと集中が難しい。

（質問者）太陽に集中すれば？

それは可能です。ですが毎日毎日太陽だけ。太陽の中に神様います。それが瞑想の対象になれば、それで大丈夫ですよ。すべての中に神様いますから。

（質問者）私は神様というのは、「ひとがた」だと思っていたので。太陽もＯＫですね。

自然の太陽とは考えないでください。その太陽は神のシンボルである、そのことを考えて瞑想してください。そうしないと、普通の太陽を瞑想して何も結果は出ない。本当に太陽は神のシンボルである、と考えることができれば大丈夫ですよ。

（質問者）ありがとうございました。

（賛歌奉献なし）

（20201122『福音』勉強会　以上）